

イップスを有する日本人大学生野球選手の サポートの阻害要因：チームメイトを対象として

○野栗立成¹・川田裕次郎^{1,2}・松崎慎平¹・山口慎史^{1,3}・広沢正孝^{1,2}・柴田展人^{1,2,3}

(¹順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科,²順天堂大学スポーツ健康科学部,³順天堂大学スポーツ医科学研究所)

キーワード：イップス, サポート, 阻害要因, 野球

問題と目的

近年、野球選手がイップスに陥ることにより投・送球のパフォーマンスを低下させることが報告されている(曾田, 2016; 金子, 2017)。彼らが訴える症状には、身体的症状(例えば、手首がロックする感覚など)と心理的症状(例えば、ネガティブ思考など)があり、投・送球が困難な状態が断続的に出現するようである(曾田, 2016)。

イップス症状の改善を試みた Bell et al(2007)は、

「Solution-Focused Guided Imagery(SFGI)」というイメージ技法の有効性を報告している。しかしながら、現場の指導者や選手が行える対処方法や支援方法は確立されていない。

このような状況を踏まえ、野栗他(2017)は高校野球指導者を対象に、パフォーマンスの回復が見られたイップス選手への指導方法として「周囲との調整」「ポジティブな声かけ」「コンバート」「技術指導」を報告した。また、チームメイトがイップス野球選手に行ったサポートとして「技術指導」「イップス症状に対する容認」「専門家の紹介」「練習メニューの提案」「イップス症状の受容支援」を報告している(野栗他, 2018)。

一方で、サポートを積極的に行わなかったチームメイトが存在することも明らかとなっている。ここには、チームメイトがサポートすることを阻む要因が存在している可能性がある。そのため、現場の指導者やチームメイトが簡易に行える改善指導方法を検討していくためには、チームメイトのサポート行動を阻害する要因を把握する必要があるといえる。

そこで本研究は、チームメイトがイップス野球選手へサポートを行なう際の阻害要因を明らかにすることを目的とした。

方法

1.調査対象者と調査期間 大学野球チームに所属していて競技経験10年以上で既に引退している男性11名(投手3名、内野手7名、外野手1名、平均年齢22.2歳、平均競技歴12.9年)を対象とした。平成29年12月下旬から平成30年1月上旬に質問紙調査を行った。

2.調査内容 調査内容は、事前にサポート行動経験の有無への回答を求め、サポート経験のない選手を対象に、「なぜサポートを行なわなかったのですか。」という質問を行い自由記述で回答を求めた。

3.調査手順 自由記述で得た阻害要因を、KJ法(川喜田, 1995)を用いてスポーツ心理学を専門としている大学教員1名と、野球競技歴10年以上でスポーツ心理学を専攻している大学院生1名、野球競技に馴染みのない大学院生2名とともに分析を行なった。

4.倫理的配慮 得られたデータは、研究者が管理し、公表の際には、対象者が特定できないようにした。

結果と考察

サポートの阻害要因として13個の意味内容が抽出された。これらは、「支援のための情報不足」「当事者責任という信念」「イップスへのサポートの軽視」「当人のサポート不要の認知」「他者からのサポートの認知」「過去のサポートでの悪化事例の経験」「自分のイップス症状」に分類された(Table 1)。

Table 1 サポートへの阻害要因

支援のための情報不足	・正しい支援法を知らないから (5) ・イップスの原因が分からないので、アドバイスできない。
当事者責任という信念	・自分で直すべきだと思うから。 ・自分がどうこう言う問題ではないと思ったから。
イップスへのサポートの軽視	・イップスをそれほど重く受け止めていなかったから。
当人のサポート不要の認知	・イップスの選手が支援を必要としなかったから。
他者からのサポートの認知	・個々で監督、コーチから指導を受けていたから。
過去のサポートでの悪化事例の経験	・支援すると余計に悪化してしまう経験があったから。
自分のイップス症状	・自分がイップスでそれどころじゃなかったから。

注：() 内の数字は意味内容の件数を示す。

本研究において最も多く報告されたものは「支援のための情報不足」であった。選手が簡易に行える改善支援方法が未だ確立されていないことがこの一因と考えられる。「当事者責任という信念」や「イップスへのサポートの軽視」が抽出され、イップスの発症を認識してもイップスへのサポートの考え方によってサポートが引き起こされない可能性があると言える。「当人のサポート不要の認知」「他者からのサポートの認知」が抽出され、イップス選手がサポートを望まない場合や他者からのサポートがあると認知した場合には、サポートを控えることがうかがえる。これらに加えて、「過去のサポートでの悪化事例の経験」や「自分のイップスの症状」がある場合にもサポートが控えられることが明らかとなった。

これらのことから、チームメイトがイップスを認識していたとしても、サポートを阻害する要因が存在し、チームメイトによるサポートが抑制される可能性が明らかになった。

利益相反開示；発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業・団体はありません。

(NOGURI Ryusei, KAWATA Yujiro, MATSUZAKI Shimpei, YAMAGUCHI Shinji, HIROSAWA Masataka, SHIBATA Nobuhito)